

花葉の腋に数個束生し、淡紅紫色、がくは筒形、帯紫色の隆起した脈があり、有毛、5裂し、裂片は筒部より少し長く先は鋭く尾状に尖り斜開する。花冠は長さ10~15mm、がくより超出し、外面は微毛がある。種子は長さ2.5×1mm、狭卵形、褐色である。ヨーロッパ産（国立科学博物館収蔵）の一部の標本を見た限りでは、葉の大きさや葉面の毛の量、がく裂片の尖り具合や毛の量などに、変異の幅が大きいようであった。ヒメオドリコソウに似ているが、葉は顕著な長柄があり、葉面は皺がなく、深い切れ込みと尖った鋸歯があり、花葉は赤紫色を帯びない。などで容易に識別できる。

ヨーロッパでは耕作地にやや普通に見られ、イギリスの一部に帰化が知られているが、普通には

なっていないという。

Lamium hybridum Vill., Hist. Pl. Dauph. 1 : 251 (1786)

Voucher specimens. Pref. Kanagawa: Kamakura city, Syoumyoji Temple (H. Takahashi, Apr. 20, 1992, KPM-104697), Pref. Fukuoka: Kita-Kyusyu city, Moji-Ku, Kitaku (S. Tutui & H. Masaki, Apr. 12, 1992, KPM-81282).

終わりに標本の閲覧を許された国立科学博物館の小山博滋博士、生育地をご案内下さった金子紀子さん、北九州市の標本をご提供下さった筒井貞雄氏および真崎博氏に衷心より感謝の意を表する次第である。
(神奈川県立博物館)

ニュース

コマロフ植物研究所の近況

My Recent Visit to Komarov Botanical Institute, St. Petersburg

今年(1992)3月下旬から4月上旬にかけての1週間、旧ソ連邦の旧レニングラード、現セント・ペテルブルクにある、コマロフ植物研究所を訪問した。

同研究所には577万点に達する標本と50万巻以上を収蔵する植物学図書がある(Holmgren et al. 1990)。その標本室は18世紀初頭のピョートル大帝のコレクションを基礎とするもので、18世紀から19世紀にかけて活躍した、ロシア分類学者の命名にかかわる、ロシア国内はもとより、極東、中央アジアならびにヨーロッパ、地中海、小アジアなどの地域のタイプ標本がほとんどここにあるといえる。私の訪問の理由も同研究所に保管されるベンケイソウ科その他のタイプ標本を研究するためであった。

数年前から訪問を計画していたが、ここ数年来の同国の状況から今日まで見合せてきた。現在ロシア共和国と国名も変わって、国自体が新たなスタートを目指している様子が新聞などのニュースで報じられている。

コマロフ研究所の現状はGrubovとSegienko(1988)やそれを受けてJeffrey(1991)が報告

していた。しかし、正直に言って、百聞は一見にしかずのたとえのように、これらの報告からは同研究所が置かれている状況を理解するのは難しかった。実際にコマロフ研究所に到着するまで、急激な社会改革の中でどういう状態になっているのか気がかりであった。古い建物で補修が必要にもかかわらずその経費がないという危機的状況も報じられていた(Jeffrey 1991)。

研究者の生計も心配であった。外貨との交換レートでも、1990年には1ルーブルが240円であったのが、いまでは1円程度に切り下がった。研究者の月給900から1,000ルーブルは、1,000円程度に過ぎない。

セント・ペテルブルクには、フランクフルトから入った。研究所にはいくつかの建物があるが、高等植物の標本室と図書室がある4階建ての建物を中心になっている(図1, 2)。外壁は黄色に塗られた、その建物の玄関部分には円形のポーチがあり、狭い入口を入ると、受付があり、直進すれば図書室、階段を上げれば標本室に通じる。

1階は図書室、2階以上が標本室となっている。標本室は、シベリア、東アジア、中央アジアなど

と地域別に分かれている。また、タイプ標本は他の標本とは別に、地域別にそれぞれの地域の責任研究者の部屋の内にある標本箱に収納されている。地域別方式はフロア研究には便利である。

キリンソウ *Sedum aizoon* L. を例にとると、シベリア標本室だけで、標本は優に100点はある、東アジア標本室にもそれぐらいはある。かなりの精度で採集されているといえよう。もちろん、シベリアの標本数ではキューその他の標本館もまったく及ばない。

コマロフ植物研究所といえば、日本人にとっては Maximowicz の標本が最も関連深い。図書室の一角に、宮部金吾先生が札幌の博物学会誌に掲げた彼の肖像画があった。日本人では、宮部先生と1884年にセント・ペテルブルグで開催された万国植物学・園芸学会議に派遣された田代安定氏が Maximowicz の時代にここを訪ね、長く滞在したという。

Maximowicz のタイプはほとんど Gurbov 博士の部屋に保管されている。保管は良好であり、概ねきちんと整理されている。Gurbov 博士は太平洋学会議のときに来日し、大井次三郎先生、水島正美先生には特に親切にもてなされたという。私は彼の部屋で午前9時から午後6時まで標本を調べた。博士は11時頃までには来て、Plantae Asiae Centralis の原稿執筆に余念がなかった。時折電話で中断されることがあったが、ほとんど仕事に没頭できる環境のように思えた。

Takhtajan 教授の部屋は2階にあった。標本箱の代わりに図書が部屋の四周を埋めていた。

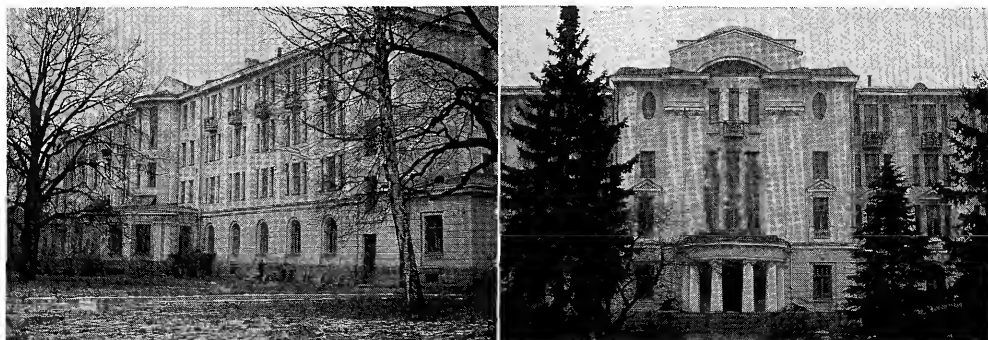
Wielgorskaya 女史が教授の仕事を補佐していた。ここには、パソコンと小型ながらコピー機があった。Peter Raven 博士をはじめとする米国の援助で、英文版中国植物誌やコンピューター・ネットワークづくりに協力していると話してくれた。

外国からの訪問者が少ないせい、話しははずんだ。特に3月22日に亡くなった Cronquist 教授と過ごした日々の思い出は印象的だった。Index Herbariorum が彼を、この研究所の Adviser として、研究上最も高いポストにある書き方をしているが、実際に研究上で指導的役割を果たしているといえる。82という高齢にもかかわらず精力的に仕事をこなしていたのが印象的であった。

最近のロシアの国情が、研究意欲まで放出しかねない状況にあることも想像されたので、わずかの間の滞在の限られた見聞ではあったが、その間、所員が研究意欲まで失っていないことを目の当たりにできたのは幸いであった。心配された建物の補修は、細々ながらも進められていた。外国郵便も米国からの航空便が、3ヵ月遅れではあるが、着いていた。どんな学術雑誌も閲覧でき、また秘密事項が減った現状を、話をした所員全員が喜んでいて、英文の論文が歓迎されるようになるとも聞いた。

しかし、コマロフ植物研究所には、コピー機のような西側ではどこにでもあるようなものも含めて、機器の援助が必要である。機器の不足が、過去の遺産を十分に活用できる状況から遠ざけているのが残念である。

共同研究は、同研究所の維持発展に少なからず



Figs. 1 and 2. The main building of the Komarov Botanical Institute, St. Petersburg.

貢献するのではないだろうか。国の体制の違いは大きいが、模倣して作られた中国科学院のそれに近いへん類似している。

Takhtajan 教授のように英語で闊達な会話ができる研究者は少ないが、込み入った話でなければ、たいがいの研究者と意見交換はできる。

北日本のフロラ研究はその過程で、一度は沿海州やシベリアとの比較研究を避けられぬだろう。現地との共同研究を考えるとコマロフ研究所は遠いが、過去の蓄積を活用した研究展開を考えたらここ以外、最適な相手側研究機関はないだろう。

Takhtajan 教授や日本を知っている Grubov 博士などを別とすれば、日本でも分類学の研究ができるのか、といった質問が飛び出すような、ロシ

ア人学者の現状認識というか、一種の優越感に驚くこともたびたびであった。

引用文献

- Grubov V. I. and Sergienko L. A. 1988. On the condition of herbaria in the USSR. Bot. Zhurn. 73 : 1507-1511.
- Holmgren P. K., Holmgren N. H. and Barnett L. C. 1990. Index Herbariorum Part 1 : The herbaria of the world. 8th edition. New York Botanical Garden.
- Jeffrey C. 1991. The condition of the Leningrad Herbarium. Taxon 40 : 459-460.

(大場秀章 Hideaki OHBA)

田中芳男・小野職愨撰：有用植物図説について

On Yoshio Tanaka and Motoyoshi Ono (ed.) : Illustrations of Useful Plants of Japan.

先にギンモクセイ、キンモクセイについて報告した際（本誌 66 : 246, 1991），1895年発行の Useful Plants of Japan という著者不明の本があり、それにキンモクセイ、ギンモクセイの新学名が載せられているらしいことを述べた。著者不明ということでこれを紹介した Green はこの学名を採用しなかったが、多数の図を載せた著書に著者不明ということはありません、またこの本で当時新進の研究者であった矢田部、松村、牧野氏等の他に日本人として新学名を付けた人がいたらしいので、どのような本か知りたいと思っていたところ、それが何であるかが分かったのでここに報告する。

該当する本は田中芳男・小野職愨撰・曲直瀬愛・小森頼信校：有用植物図説である。明治24（1891）年に大日本農学会から発行された和綴の本で、図3冊、解説3冊（別に英語版1冊、索引1冊）に1016種の原色図と解説とが載せられている。1頁に4図ずつ載せられ、図の上には学名と科名が記されている。応用を目的としているため、配列の順序は本草書と同じで葉菜、根菜、薬用、鑑賞といった区分で並べられている。覆栽という項

があり芝生や砂防用の植物が載せられるなど目新しいものもある。別冊としてやや小型の洋綴で Useful Plants of Japan の表題のもとに、英文の解説書1冊と和名・学名の索引が1冊ある。英語版には Agricultural Society of Japan とあるだけで、著者、編者は載せられていない。服部雪斎の描いた木版刷で、図は簡単だし色は単純なので、岩崎濯園や飯沼慾斎の図に比すべくもないし、解説文も短く、学問的にあまり重視しなかったとみえ、当時の植物学者は全く引用していない。しかし、永年にわたって生物を描いていた画家の手になるものだけあって、植物の特徴をよく捉えていて、何の植物かは正しく判断できる。千種に及ぶ多数の植物が描かれたものなので便利であり、当時7円40銭という豪華本にもかかわらず1895年までに3回の版を重ねている。今日でも通用する内容で、一見する価値のある本である。最近、科学書院（板橋区成増 2-37-2-203）からこの復刻版がだされたので、約8万円と高価だけれども興味ある方は利用することができる。

この本の学術的な価値は、小野蘭山以来の本草学の植物部門に関する最後の集成であることにあ